

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

長谷川 宏

当館収蔵文書記録の中かなりの量の書籍が含まれているが、書籍の内容を表示する目録の記述形式は文書記録の目録とおのずから異なるので、重複の手間はかかるが開館以来今までに刊行された三〇余冊の文書記録の目録とは別に、書籍だけの目録を作製すれば利用の開発に役立つであろうことは明らかである。なおこの目録は、当館収蔵の文書記録および県行政文書の利用研究に資する目的で収集し閲覧に供している書籍(昭和五九年三月現在および六一年までの増加目録あり)とは全く別のもので、家単位伝来の目録体系から切り離された資料単位の総合目録にもなるわけである。図書館がその種別によつて課せられた使命により、その必要とする資料を収集し蔵書構成をはかろうとするのとは異なり、特に近世から近代に至る武蔵国の埼玉地域の地で、どんな書籍が庶民によつて読まれ使われたかを知ろうとする調査資料にも近い。庶民が読み利用した書籍には、刊行されたものだけでも「国書総目録」に洩れたものが、見受けられ、そうした意味でもこの目録の作製は必要であったといえよう。本稿は最初、筆者がこの作業にかかつて半年間の作業報告として

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

執筆したものであるが、こうした報告は実務上各種の問題を提供することが容易なので、この形でまとめてみたい。執務時間は平成三年四月から一〇月初旬まで週三日(約七〇日)一日七時間の作業でどのくらいの数量をこなし得たか、が第1表である。

表1：平成3年4～10月第1週まで週3日、1日7時間宛の作業量

家別	文書点数
会 田	10,015
相 沢	3,739
鬼 久 保	3,606
平山(小)	2,026
吉田(佐)	2,303
西 角 井	11,481
若 林	228
内田(正)	937
川 鍋	362
土 屋	925
町 田	285
11 家	35,907

コレクション数では約3.7%
文書点数では 10.8%
が再検討された。

現在当館収蔵二九〇コレクション、約三三万点の近世・近現代文書記録のうち、コレクション(家数)では三・七%、文書点数では一〇・八%を検討し、その一〇・八%にあたる三万五千余点の中か

ら七・六%にあたる二、七六二冊の書籍を拾い出して目録が作られた。こうしてみると全文書約三三万点の中には、単純計算すると約二万五千冊の書籍が含まれているであろうと思われる。しかし第2表の集計によればかなりの多冊物や叢書があるから、部数で見ると約半数の一万二千余部と推定される。しかし実際にこの作業が完了してみないと、こうした単純計算の数字はあてにしないほうがよいだろう。

作業の手順であるが、はじめ書架配列の順つまり各单位(家)が書庫内では五十音順で配列してあるからその順で始めたが、なんとも味けなく無味乾燥の感がして、結局は全部洩れなく手が廻ればよいことを理由にして、その時その時の興味関心にしたがって随意に手がけることにした。つまり質的に変化に富み、作業者の意欲を絶えず持続させるような進め方を試みたわけである。代官の手代を家族に持つ家、神官、漢学者、教科書の多い家、修験、通俗小説が多く残っている家、などという選び方である。蔵書家として聞こえた家はあとの楽しみに残してある。また曾って筆者が書籍目録を作った数家もあとに残して、最後に再検討するつもりである。

それぞれ一軒々々の家で、既に作製された文書の目録の「典籍」の枠にこだわらず、目録全部から、これは…と思う資料を現物であったって、書籍とされるかされないか判定して目録を作製した。曝書のようにすべてを原物で当たったわけではないから、文書記録の中に見落としはあるかもしれないが、既刊の目録で典籍の部に分類されて

いるものはすべて原物で再検討した。典籍以外の一般文書から、後掲のようになり書籍と判定したものがあがるが、典籍の部からは日記類、日常生活のメモ覚え書、子供の習字帖(手本とは別)、学習ノートの類は相当振り落した。この作業の過程で予測されなかったことは、かなり汚損された資料が混じていて、そのままでは読めないから、壁土やネズミクソを払い、湿気をかけてアイロンで紙葉のまくれやシワをのばしてから目録作業にかからねばならないことであった。その家に共通して保管状態の悪い家もあつたし、またきれいな書籍の多い家でも特別に汚損したものが残っている家もあつた。こうした虫損・鼠害・破・汚・ムレ・フケなどの甚しい書籍は、普通は図書館では収蔵の対象にしないからまことに珍奇な現象であつた。しかし一面考えみると、文書・記録がきれいになっているのはそれだけ研究者がいて利用されたのであり、汚い書籍が残っていることは、収蔵されて以来何年間も閲覧者のいなかつた証拠でもある。こうした書籍を容易に利用できるような目録の整備が急務であると痛感せざるを得なかつた。

第2表はこの期間に目録化した国書と漢籍の大分類別の部数と冊数、また近世と近現代に分けた部数と冊数である。(分類表は内閣文庫の国書および漢籍の分類表に準じたものを考えている。)

ほんとうの意味の漢籍はいまのところ極めて少く、多くは和刻漢籍である。国書と漢籍の比率は部数で九対一であるが、冊数で八対二となるのは、漢籍では「十三経注疏」のように一部で百数十冊と

表2：表1の期間に目録作業を終了した
書籍の大分類別部数（冊数）

分類	部数(冊数)	内 訳	
		近世	近現代
国書			
総記	42(84)	18(35)	24(49)
神祇	119(145)	61(80)	58(65)
仏教	58(110)	54(105)	4(5)
言語	28(36)	22(30)	6(6)
文学	217(390)	186(349)	31(41)
音楽演劇	29(30)	22(22)	7(8)
歴史	112(263)	81(139)	31(124)
地理	102(168)	63(97)	39(71)
政治法制	100(142)	76(115)	24(27)
経済	23(36)	20(33)	3(3)
教育	273(530)	104(104)	169(426)
そのうち			
教科書			
近世	93(93)	88(88)	5(5)
近現代	154(359)		154(359)
理学	42(44)	30(32)	12(12)
医学	34(42)	33(41)	1(1)
産業	20(34)	9(23)	11(11)
芸術	11(33)	6(10)	5(23)
諸芸	68(103)	60(95)	8(8)
武学武術	13(13)	11(11)	2(2)
小計	1291(2203)	856(1321)	435(882)
漢籍			
経	56(354)	54(352)	2(2)
史	4(51)	4(51)	
子集	20(78)	20(78)	
集	26(76)	23(59)	3(17)
小計	106(559)	101(540)	5(19)
国書・漢籍	1397	957	440
総計	(2762)	(1861)	(901)

国書・漢籍の比率% 近世・近現代の比率
 国書 92.0(79.7) 近世 68.2(67.3)
 漢籍 8.0(20.2) 近現代31.6(32.2)

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

いう大部のものがあり、五経総義・四書総義のように冊数の多いものがある。問題は近世と近現代の比率である。はじめ近世の書籍だけの目録を作ることを考えた。なぜかという、これを近現代までふくらませるとぼう大な量になっていつ完了するかかわからない。また印刷物としての目録も大部なものになるので、公的機関の予算措置としての問題も出てくる。しかし後にふれる教科書のことあり、ここでは強いて下限を切らず、いちおうは収蔵文書の中に、ある（存在する）書籍すべての目録を作る、ある

（存在する）ものはすべて目録にとる方針で行くことにした。図書館の蔵書構成とは性格がちがうから、孤立した資料があってもそれについては同類の資料を補強する措置はとらないが、ただ印刷する目録には凡例と並べて一種の利用案内、例えば
 太政官日誌、官省布告書、官報、県報、新聞雑誌、教科書、あるいは往来物、近世小説類
 等についてはどんな目録を見たらよいか、どんな機関、施設へ行ったらよいか……の案内を付す必要があるかと思われる。（レファレン

表3：同上期間に目録作業を終了した中小分類別の部数(冊数)

分類	部数(冊数)	刊写時代区分		分類	部数(冊数)	刊写時代区分	
		近世	近現代			近世	近現代
国書				随筆	4 (11)	3 (10)	1 (1)
総記				戯文	11(11)	11(11)	
図書目録				日記紀行	1 (1)	1 (1)	
事典事彙	11(14)	8 (11)	3 (3)	文集	3 (5)		3 (5)
叢書全集				消息	2 (4)	2 (4)	
随叢				漢文	16(17)	16(17)	
雑考	4 (16)	4 (16)		詩文集	24(31)	24(31)	
雑纂	5 (5)	4 (4)	1 (1)	(詩文評			
新聞	22(49)	2 (4)	20(45)	作詩作文	11(17)	2 (5)	9 (12)
神祇	1 (1)	1 (1)		狂詩狂文	1 (1)		1 (1)
神道	10(12)	3 (5)	7 (7)	和歌	18(21)	16(18)	2 (3)
諸家神道	3 (3)	3 (3)		選集家集	30(56)	19(44)	11(12)
教派神道	16(17)	8 (9)	8 (8)	歌合	4 (4)	4 (4)	
祭祀	8 (8)	4 (4)	4 (4)	連歌			
祝詞祓詞	16(23)	4 (4)	12(19)	俳諧	9 (13)	8 (12)	1 (1)
神社	29(29)	13(13)	16(16)	(句集)			
武蔵	23(23)	12(12)	11(11)	(月並)	16(19)	16(19)	
国学	13(30)	13(30)		雜俳川柳			
仏教	24(61)	24(61)		狂歌	7 (15)	7 (15)	
修験	18(32)	18(32)		古代歌謡	4 (6)	4 (6)	
寺院	9 (9)	7 (7)	2 (2)	近世歌謡	17(17)	16(16)	1 (1)
札所順礼	5 (5)	5 (5)		音楽 演劇	4 (4)	4 (4)	
キリスト教	2 (3)		2 (3)	(古代劇)			
言語	1 (1)		1 (1)	(神楽)	5 (5)	1 (1)	4 (4)
文字	5 (5)	5 (5)		能楽	6 (6)	5 (5)	1 (1)
音韻	5 (11)	4 (10)	1 (1)	(浄瑠璃)			
語義	1 (1)		1 (1)	(長唄)	10(10)	9 (9)	1 (1)
語法	4 (5)	2 (3)	2 (2)	歌舞伎	4 (5)	3 (3)	1 (2)
辞書	12(13)	11(12)	1 (1)	歴史	18(121)	10(25)	8 (96)
外国語				古代中世	16(37)	12(33)	4 (4)
文学				近世	6 (16)	4 (13)	2 (3)
小説 古代				近代	7 (7)		7 (7)
小説 中世	2 (5)	1 (1)	1 (4)	雑史	11(15)	10(11)	1 (4)
近世小説	20(41)	20(41)		変災事件	30(32)	30(32)	
合巻	16(94)	16(94)		伝記	19(31)	12(23)	7 (8)
近代小説	1 (1)		1 (1)	系譜	1 (1)	1 (1)	

分類	部数(冊数)	刊写時代区分		分類	部数(冊数)	刊写時代区分	
		近世	近現代			近世	近現代
史料	2(2)	2(2)		習字手本	7(7)	7(7)	
外国史	2(2)		2(2)	女子用	8(8)	7(7)	1(1)
地理 地図	27(60)	12(13)	15(47)	近代教科書	10(17)		10(17)
遊覽	27(27)	19(19)	8(8)	修身	18(52)		18(52)
武蔵	30(33)	19(22)	11(11)	国語	47(120)		47(120)
江戸	13(38)	12(37)	1(1)	(算数)			
世界外国	5(10)	1(6)	4(4)	(数学)	10(21)		10(21)
政治法制	9(15)	3(8)	6(7)	地理	23(30)		23(30)
法令	26(56)	18(47)	8(9)	歴史	12(22)		12(22)
官職	9(14)	9(14)		社会	1(1)		1(1)
補任				理科	15(24)		15(24)
(武鑑)	32(32)	32(32)		唱歌	2(2)		2(2)
(役人付)				図画	5(7)		5(7)
近代	4(5)		4(5)	習字	11(43)		11(43)
埼玉県	3(3)		3(3)	実業			
典例儀式	6(6)	5(5)	1(1)	理学			
諸礼	2(2)	2(2)		天文曆学	17(18)	9(10)	8(8)
(年中行事)				算学	17(17)	14(14)	3(3)
(風習)	4(4)	3(3)	1(1)	(地学)			
建築調度	1(1)	1(1)		(気象鉱物)	1(2)	1(2)	
装束服飾	4(4)	3(3)	1(1)	物理化学	5(5)	4(4)	1(1)
経済	6(6)	3(3)	3(3)	博物	2(3)	2(3)	
^{じかた} 地方	17(30)	17(30)		医学薬学	34(42)	33(41)	1(1)
教育	7(7)	3(3)	4(4)	産業	20(34)	9(23)	11(11)
教訓	17(19)	11(11)	6(8)	芸術	11(33)	6(10)	5(23)
心学	2(2)	2(2)		諸芸			
往来物	7(7)	6(6)	1(1)	茶道	4(5)	3(4)	1(1)
熟語	5(5)	5(5)		作庭			
消息	34(34)	34(34)		花道	11(35)	11(35)	
訓育	10(10)	10(10)		香道	1(1)	1(1)	
歴史	1(1)	1(1)		占卜	25(35)	20(30)	5(5)
法令	3(3)	1(1)	2(2)	料理	3(3)	3(3)	
地理	7(7)	7(7)		玩具			
物産				遊技	6(6)	6(6)	
実業	11(11)	10(10)	1(1)	遊戯	5(5)	5(5)	
年中行事				武学武術	13(13)	11(11)	2(2)
理学							
合書							

分類	部数(冊数)	刊写時代区分		分類	部数(冊数)	刊写時代区分	
		近世	近現代			近世	近現代
漢籍				兵家	3 (18)	3 (18)	
經				法家			
易	3 (12)	3 (12)		農家			
書	5 (20)	5 (20)		医家	4 (27)	4 (27)	
詩	6 (16)	6 (16)		天文算法			
礼	2 (13)	2 (13)		術数			
春秋	5 (25)	5 (25)		芸術	1 (1)	1 (1)	
孝經	4 (4)	4 (4)		譜録			
群經總義	2 (149)	2 (149)		雜家	3 (6)	3 (6)	
(四書)				小説家	1 (10)	1 (10)	
大学	3 (3)	2 (2)	1 (1)	類書	2 (5)	2 (5)	
中庸	2 (2)	2 (2)		积家			
論語	5 (15)	5 (15)		道家	3 (8)	3 (8)	
孟子	8 (18)	7 (17)	1 (1)	集			
四書	6 (50)	6 (50)		別集	6 (17)	6 (17)	
小学	1 (3)	1 (3)		總集			
訓詁				断代	9 (19)	9 (19)	
字書	3 (24)	3 (24)		通代	11 (40)	8 (23)	3 (17)
韻書	1 (1)	1 (1)		尺牘			
語学				詞曲			
史	4 (51)	4 (51)		戲曲小説			
子				叢書			
儒家	3 (3)	3 (3)					

ス・ツールとしての書誌目録を提示したらどうか)

第3表は第2表を作製した基礎作業の表である。この表の数字に見られる種々の傾向はまだ問題にしないでほしい。これらの数字は二九〇コレクション、三三万点の全資料の洗い出しが終らなければ安定しないのである。今後まだまだ流動的であつて、この分野はこういう傾向であるなどという結論的なことは、全部完了しなくてはいうことはできないであろう。

書籍ということばについて

実際に「書籍」とは何かということばは、わかりきつたことのようにであるが、げんぶつにあたると首をひねることがある。また「典籍」ということばもあつて、上田万年の「大字典」は「典籍」を書籍のことと簡単に片づけ、長沢規矩也の「図書学辞典」は「書籍」も「典籍」も共に書物としているが、古書といわず「古典籍」というと、なんとなく程度の高い古本のように感ぜられると、世間一般の通念をとらえている。古くは「典」は伏羲・神農・黄帝・堯・舜「五帝之書」であり、それから変化して「法制」の意であつた。「典籍」ということばは、それも五経四書、とくに四書の倫理道德の強制力の臭いが強いので、倫理道德に弱い私個人の肌にあ合わない。世間一般の通念として無色透明であると誰かが保証してくれば、「典籍」ということばを使用するに吝かではないが、ここでは「書籍」ということばを使用してゆきたい。

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

文書記録に対して著述・編さん物ということばがあるが、単なる意志の伝達や備忘のメモに止まらず、自分の思想や意図に基いて構成され、文字文章で記述されるものがそれである。形体的には木簡・竹簡から始まって帛・紙の一枚物から冊子に、そして手書きから印刷に変化し、さまざまに装訂されるようになった。そして現在の写真影写本から、ワープロ・電算機に至る製法の変遷も含めて書籍の歴史がある。天保期、幡羅郡中奈良村の野中彦兵衛老は文書記録から著述編さん物をひつくるめて、刊本・写本を問わず冊子形のものに「書籍」と呼んだ。当時の庶民の通念はこのようなものであつた。この「書籍」から文書・記録を引き抜いたものを、今回の「書籍」に考えたい。

ふつう書籍に入れないかもしれないが、

その作製目的と効用によって書籍とした例

○個人的な業務のハンドブック(便覧)としての編さん物、個人的な手控を含む。(現在までの事例をいくつか挙げてみる。)

御代官并手代在出其外諸雜用定書 写 一冊 半

論所見分御代官罷越候入用、手代罷越

候論所、城附郷村引渡ニ罷越御代官入

用、囚人請取并ニ召捕ニ罷越候手代入

用 相沢五〇二

公事方御規定書留 写 一冊 大

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

関八州御料私領より訴出候出入之事、

双方御料一支配出入之事、関外御料私領より訴出候出入之事、口書認方之事

……口書諸文言、追放、所払、上証文、

欠落人跡株、……帰住、越石、小作金質

金訴状一紙願、質地、離縁、手鎖、下手

人、身代限、欠所田畑、勘当伺、浪人者

相沢五一七

御普請定直段定法帳

写 一冊 半横

上会下村治助定請負直段、寛延元辰間

七月より用之、……高欄付板橋長二間

中二間已上之分、一〇間巾二間已上之

分、堤川除定法、右一〇ヶ條御勘定所よ

り被仰渡候写

相沢三二二

武蔵国中神職吉田家役所書留之写

角井主膳〔写〕

嘉永四・墨付八丁 半

此一書ハ中川氷川明神主小山播磨吉

田家より三四年以前神道許状請候節右

江戸役所執役小川織江より借請写取候

由 西角井一四七二

内寄合見出

写 存三冊 半

第一冊(内扉朱書) 自明和二酉年至享和元

酉年、前後三十七年間之記録也、但此

原本一部八巻也、今鈔出於其要而為四

巻冊、中有目次而無箇條者原本之俣

也、此書式冊宛合巻シテ四冊有之、二

ノ巻未見出、該八巻目ハ享和二戌年ヨ

リ文化三寅年迄五ヶ年分有之、明治四

十三年七月五日正一記

(内扉) 明和六丑年ヨリ安永五午年迄

八冊之内

西角井七二二

第二冊(内扉) 安永六一天明元、天明二

六

西角井七二三

第三冊(付箋朱書) 三ノ巻欠、但天明七未

年ヨリ寛政八辰年迄十ヶ年卷冊、四十

三年七月三日不見当(内扉) 寛政九一享

和元、享和二一文化三

西角井七二四

寺社奉行株筋并月番書

嘉永元、五、角井主膳写

此書物之儀は中々以手ニ入可申品ニは

無之所、懇意之屋敷より借用熟読候通

候積りて写取置申候、密々之儀に付決而

他見いたすこと申間敷

西角井一〇二四

式内神社名イロハ索引

写 一冊 中横

虫ムレ

西角井一四二九

式外旧社 写 一丁 大 仮綴

倭文一神、若雷神、伊多之神、河輪社、稻

取社、江戸神社、湯島神社

合綴：延喜式卷九之一六東海道第一一武

蔵国 六丁 西角井五三九三

武州式郷半領大場川悪水吐増坎伏込御普請築留メ勲

築唄 市村宗四郎様事月例庵戯作 写

天保四、正 小横 虫

ヨウ・イコウ・ノサアン ヤア……

奇妙ちやうらい式郷半 天ニも保ツ巴

二四ツの年 大場川なる水災難儀 坎

樋壱ツニ吐口の 縊り目ほどく増坎や

…… 平山(小) 四〇九

○業務上必要とするパンフレット類の合綴

〔大成教教規外関係書類〕 刊

合綴一冊 半・中 鉛印

内容：大成教教規(明治一九認可)大成

教條例、大成教條例附録、挑灯、幟、

管長示達、参田事業翼賛興儉法規約、

教導職試補選挙状、昇給選挙状書式、

教会所設置添翰願書式、大成教会入

社規約、管長示達(明治一六)、教導

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

職試験科目(明治二三)

西角井九四九七

○時勢への興味関心からの編さん物

亜美り加船・魯西亞船渡来留記 写 一冊 大

嘉永六、六月ヨリ九月迄

浦賀之者より江戸身寄之者江之手紙写、

浦賀与力相原某より内密申越候写、魯

西亞人江申渡、可相渡書付、長崎奉行江

被仰遣候趣、備前守殿御渡候御書付写、

蒸気船軍艦九月廿八日、十月朔日、松平

下総守殿御固持場詰家来何某より江戸

同家中江差越候文通之写、かひたん差出

候封書和解、異国船帰帆後大番頭九鬼

式部少輔江海岸為見分可被差遣旨被仰

出候ニ付大御番同役中より申達候書付

写外 西角井七九四

邯鄲物語(邯鄲春夢物語) 後篇二、後篇四 写 (元

橋) 旭堂春夢述 存二冊 半

内容：後篇二 大坂井ニ江戸打毀之事、

江戸強盗諸々ニテ大金ヲ掠とる事、秩

父一揆諸々打こハシの事……慶応二、

七十四叟旭堂春夢述

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

田口(栄) 一九八六

○家事管理上の便をはかり、また有職故実の知識を伝承するために自家で作製した編さん物

御式正御道具絵図 写 五六枚 二七、八×四〇セ

ンチ

厨子棚、短冊箱、元結箱、料紙箱、料子

硯外

西角井三四一

○業務とは無関係に個人的な興味・関心による編さん物あるいは記

録

幡羅一郡八十八箇處道記 なちのき 野中彦兵衛〔編〕 天保

九、写

合綴：幡羅八拾八箇所遍礼順行記 野

中休意〔編〕 天保七、写 計四三丁

中 野中七七七

鷺山の記 写 二〇丁 大 うち彩色挿絵八面

会田一〇六三

当処始之事 附、当家始之事 鬼久保小左衛門光広

安永五、七、五 二二丁 大 埼玉郡小久

喜村 鬼久保二六四六

老談記并相沢繒罔 延享二、一〇月於江戸写

八丁半 相沢六〇五

○娯楽読物(この類は典籍の通念には含まれ難い)

七二

東海道小夜白浪 とうかいどうさよのしらなみ 夷福亭宮守作 歌川国丸画

西宮春案軒発版 文政四、六冊合綴

中 野中三二七六

(方言修業) ひだしゆぎやう 金草鞋 かめのわらじ 十返舎一九戯著 月磨画

錦森堂 文化二〇、

初・二編合綴 一五、三〇丁 中版

心・ゑと見物 野中二九六六

○世相を諷刺した戯文(これは反典籍カ)

獸六歌仙 写 状

嘉永二年のとし弥生のはしめつきた小

金井といへる野辺にて御狩侍りに

……狸の腹鳴、兔の月はね、化田の狐、

武猪の床住、むしなのうろつき、妻乞の

小鹿 若谷二四四三

○学者のノートは雑抄として書籍に入れる。

游龍園雜記 佛説抜抄、付、経史雜話 若林懋(嘉陵)

輯写 一四、六、三、一〇、三丁 中

内容：文王明德慎罰、雲棲大師竹憲隨

筆抄、経史諸子雜抄、秩父神社額面(富

田永世輯并校)、有聲室記(矢納村新井

氏書齋の記、天保二) 若林一六二

○一般庶民や寺子屋の子供のノートは普通は書籍としないが、資料

的価値あるものは注記して採りあげる。

代神録（書外題） 裏表紙書外題：四書白文 飯塚六

三郎 天保四写 一冊 中横

四書学習の難字書抜、ルビ付 居間

台所雑具類のスケッチ、戯画あり

野中三三二七

雑記 写 墨付二三丁 半横 書名は雑記帳の意

内容：山水草木画写、飛弾菟之渡図、唐

夫人ハ唐の博陵なる崔南といふ人の妻

にて、螻蛄故事、漢字仮名つけ、いけば

な図、木の葉墨拓 町田一八八

○質的には聖經だが形体的には書籍

大明三藏聖經目録 卷第一・二刊

四、一二、三三、二七丁 大 朱筆入

破汚損 土屋五八六

○質的には書籍だが形体的には一枚物

日用一覽表 夏井源助編輯 浦和宿 藤屋源助 明

治一〇・

一枚 四八×三八センチ 折疊 包紙

内容：明治一一年七曜早見、生年早見、

生月早見、戸籍列次早見、五等親早見

定価二銭五厘

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

西角井九九九一、吉田佐九五五

○形体的には書籍だが質的には広告印刷物

史料通信協会叢誌見本 井上頼圀、根岸武香、近藤

瓶城（編）一二丁 半 鉛印

合綴：書状 井上頼圀、近藤瓶城 風

見公紀あて、入会勧誘状、史料通信協会

規則 西角井八八九七

写本の問題点

いうならば古写本と近世写本のちがいということである。近世中期になると教育が次第に民間に普及し文字の読める者は増加してきしたが、中国に比較してみると人口の絶対数が少なかったから出版事業はなかなか採算がとれず、書籍の普及は写本にたよる率が高かった。書籍の種類・部数は多くても一つの書籍の印刷冊数は、現在の常識ではおどろく程少なかったようである。そのため写本が流行したが、この書籍の書写という方法は多くの欠陥を持っており、写本のそのまた写本になると、次第に原著のおもかげが薄くなってゆく傾向をもつ。需要にこたえるために大量に写すには原本をダイジェストに変えてゆくし、誤字脱字もあれば逆に原著者の述べていない意見を書き加えたものもある。個人的な必要から作った写本は内容

を書きとめればよいので、書名も著者も写す必要がなかったのだが、これを入手した古書店は書名がないと売れないので、勝手にあとから書名を創作する。種々の点で近世後期の写本は危ないのである。しかしこれによつて地方都市や農村に書籍が普及することができたことを知らなければならぬ。ただこれらを書籍目録からはずすことはできないから、写本評価の方法を作つておく必要がある。

原著がわかっているものはそれと比較する。

原著のわからないものは、同種のものが数部集つた上で比較する。

比較検討の方法のないものは、注記を十分に付しておく。等等……

○写本は必ずしも読者自身の書写と限らず、なかば職業的に行われていたことは、既によく知られている事実である。さらに貸本屋が刊本ばかりでなく相当量の写本の貸出をしていたと見られる。それらが諸家の蔵書にまぎれこんでいたり、貸本屋の本を底本として書写したものもかなりあるように見受けられる。

○同じストーリーの系列に入るが、写本は長短・精粗さまざまな展開をする。

歌中山吾妻物語 写 一冊 半 虫甚

抑東叡山造立之儀東照神君兼て比叡山

と同じき天台鎮護国家の靈山を造立有

度由御願深くまませしか、終に其願

成就せずして而て留り玉ふ

西角井八九二二

「 写 四一丁 半

抑東叡山造立之儀ハ神君家康公何卒比叡山ニひと敷天台鎮護の国家の靈山造立あらせたまき御望ミ増ませ共終ニ空しくならせ給ふ

西角井五四六一

中山亜相東下記 二卷二冊 写 半

上卷：東叡山草創の事、太上天皇思立

并関東難文之事附中山槐門関東下向

評定之事、勅使之旅館へ高家衆内使

之事附り中山槐門化病之事、両使登城

并殿中問答之事附り中山亜相下乗を

乗越事 松岡五〇五

下卷：両使再登城並諸侯出仕之事、勅使

殿中にて再問答の事、殿中問答并薄墨

繪旨の事、殿中問答并水戸殿御請之事

松岡五〇四

中山夢物語 文化五、写 一冊 大

抑東叡山造立之儀ハ神君家康公比叡山

と同じき天台国家鎮護の靈山を造立有

度由御望深くまませしかと終に其願ひ

満せ給はずしてやミぬ……

巻尾：あしはらやしければはしけれおのかままとても道ある世にしあらねは

藤城九三八

○書名と内容がまったく関係がない。

文法捷徑(書外題) 巻上 写 三八丁 大 朱点入

内容：太平記忠臣講釈、弓矢ハ家に伝えても(邦俗昔時皆世祿称曰弓箭家○

一句状下文自出母胎内反人情最苦、使

者……)今ハ仕へん君しらす、羽なき矢

間十太郎……菅原伝授手習鑑、一字千

金二千金三千世界の宝そと……

相沢九〇二

現代の概念でいえば學術書であるが、どの程度正確に写してあるか。

譯文筌蹄 [荻生徂徠著] 写 二冊 大

旧蔵印：黃鳥亭蔵

卷之一一三(卷二文理例、卷三助語上)

一三、一七、一、二二丁 吉田愛一二三三二

卷之四一五(卷五助語下) 二、二一、

二、二五丁 吉田愛一二三三三

通文館志 李朝金慶門撰 李朝肅宗三四・序 写

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

七冊 大 高麗朝時代の漢蒙倭清語の
学館の歴史を調査したもの。

卷之一 八、二六丁 田口栄一八四五

卷之二 五六丁 // 一八四四

卷之三 三二丁 // 一八六〇

卷之四 二五丁 // 一八六三

卷之五 二六丁 // 一八六一

卷之六・七 三五丁 // 一八六二

卷之八 五九丁 // 一八六四

教科書の問題点

教科書を典籍の尤なるものにあげる人もいるだろうが、実際の保存状態から見ると教科書ほどひどいものはないといつてよい。近世・近現代を問わず、表紙は破れ汚れ綴糸が切れて紛失し、中は書込みやラクガキがいつばいで紙葉の端は眞黒にまくれあがり、綴目の奥には虫の喰いカス・単のクソまでつまっている。これでもよく保存して置いたと感心する状態のものが多いが、大切に考えていたから残っているのだろうか、汚れていても破れていても、できるだけ復元に努めて残してゆくべきであろう。埼玉では戦後の教科書は教育研究所資料室で整理保存しているのでいつでも閲覧することができるが、戦前のものになると市町村史編纂事業でかなり集ったところもあるが、地域的に十分に県内をカバーするわけにはゆかず、東京の特殊コレクションをたよることになろう。近世の教科書になれ

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

七六

ばなおさらで、二、三の大学が往来物の収集で有名だが、もとは個人の蔵書を取めただけでそれ以後の体系的収集はしていないようだから、当目録で出来るだけのことをしておくべきものといえよう。ただ上記のように保存状態がよくなかったから完全な目録を残すことはむずかしい。教科書だから複本が多いだろうと予測していたが、往来物には案外同じものが出てこない。おそらく同じ板木の刷というのはいまのところまだ出て来ていないのではなからうか。次から次へと異なる顔なので驚くわけである。それほど近世の教科書は、同じ板木を使っているように見えても、頭書の絵がちがつていたり、前付・後付の趣向を変えたりして、まったく同じ版だというものは残っていないようである。寺子屋を経営していた家にはかなり多種類の往来物が残っているので目録上は多彩になり、同じ御家流でも時期によつて書風に流行のあつたことが知られて興味深い。

○寺子屋の教授資料

往来物写合綴 文化文政頃写 一冊 半 破汚甚

内容：文章消息往来、雜文章（金沢八景

歌、東海道往来、その他、西院河原和

護）、童子文字働覚帳、諸国御関所、梅木

和中散、京往来、女教訓案艸、猿山用文

章、百姓往来、十二月文章、名物往来、隅

田川往来、諸証文 土屋八四四

往来物合綴

刊 一冊 中 汚損甚
内容：〔商売往来カ〕 前欠 江戸 永

寿堂西村屋与八 寛政九、再版

妙義詣 高井晒我撰 高橋尚富書

江戸 星運堂花屋久次郎 寛政六・

一七丁

四民往来永楽通宝 江戸 榎本吉兵衛

寛政二、一四丁

自遣往来 江戸 西村屋与八 寛政

八・一七丁

百姓往来 武江 鱗形屋孫兵衛 一六

丁

京内詣 江戸 蔦屋重三郎 天明三・

一二丁

隅田川往来 江戸 鱗形屋孫兵衛 明

和八・一八丁

軍器歌決文字鎖 玄龍著 花屋久次郎

寛政七・一六丁

教訓往来 九丁以下欠 土屋六八九

柳糖山人享和元・書

森屋治兵衛 一冊 中

合綴：

松島往来 膝耕徳書 永寿堂西村

与八 文政四、

王子詣 朝輝齋千春誌 花屋久治良

寛政一〇、

浅草詣 中原耕張〔一〕 花屋久治郎

享和二・

成田詣 膝耕徳書 花屋久次郎

〔刊年欠〕 野中三二六三

○庭訓往来異版の一例

庭訓往来 寛永五、孟春開板（後刷） 四七丁 大

前後表紙欠 返点、オクリカナ付、部分的にヨミカナ付、頭書なし

庭訓往来抄（三卷三冊） 上卷欠 版心：庭中、庭下 川鍋二八

寛文八、刊 大（二六、五×一八、三）

注釈付

中卷二五丁 遠藤三五九

下卷二六——四三丁 遠藤四二九

〔大阪〕 大黒喜右衛門 宝永四・

庭訓（版心） 一〇九丁（前破） 大 破汚

付、実語教、童子教 頭書：古状揃、御

成敗式目、初登山（しよとうざん）手習

教訓書、風月往来 土屋七二九

（御家） 文会庭訓往来絵抄（見返） 臨泉堂眞蹟

江戸 山崎屋清七 頭書：絵入解説

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

永壽庭訓往来絵抄解（見返） 内山松蔭堂書

土屋六五六

東都 西村屋与八 天保一四・ 五八

丁 大

口絵：鳳凰、麒麟 頭書：絵入解説、異

板ではあるがNo.六五六と同じ構成による。

土屋七二八

弘文庭訓往来（見返） 青木臨泉堂書

江戸 北島順四郎 文政四・ 六七丁

大

頭書：土工農商（絵）、十二月往来、新

十二月往来（後京極良経作）、花鳥往

来、永字八法、二十六点法 川鍋二四

庭訓往来 書題簽：書本 庭訓往来 然犀

嘉永七寅冬日写 一冊 大 虫甚

全般的に詳細な割注が入る。 土屋六〇〇

庭訓往来 眞字かな付（題簽） 江戸 青雲堂英文蔵 二二丁 大

矢部二〇

庭訓往来證注大成 永井如瓶子編 山崎美成刪補

東都 山本平吉外 嘉永四・序 一、八

六丁 大 頭書に絵入で説を入れ、注釈

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

は本文に割注 矢部二一

〔庭訓往来〕 江戸 蔦屋重三郎 天明六、六〇丁

大和屋伊兵衛 寛政六・四四丁 大虫

大 前後破

前付：期月養生俗談、大行不顧細謹(マ

序によれば諸本を校合して脱文を補い誤字を改む。天明三、跋。習字手本用

マ)、巧言令色鮮矣仁、武具之大略、筆

土屋五六二

紙墨硯之説(いづれも絵入)

庭訓往来 二卷 (江戸) 出雲寺和泉掾 正徳六跋

頭書：人間食事五恩解、眞草千字文、本

二冊 大 朱筆にて返点送仮名人、習

朝書法七十二例、筆法三十八点、十四点

字手本用

之釈、学者平話之詞 土屋五六〇

上卷 六二丁 町田 九

庭訓往来 玄恵〔作〕 江戸 森屋治兵衛

下卷 六三十一一七丁 町田一九

五二丁 大 見返に原著者、書名の解

庭訓往来 二冊 写 特大(三三×二四センチ)

説あり、前後付頭書なし。裏表紙に安政

習字用手本 小虫、破〔上〕三二丁

三年入手の墨書あり。 相沢五六六

〔下〕二六丁 松岡四七六六―四七六七

庭訓往来註抄 読法附 鎌田醉翁書

○単なる寺子の習字帖はとりあげないが、刊・写を問わず有名人(地方人

浪速 田中宋栄堂(秋田屋太右衛門)

も含む)の書もしくは内容は資料的価値あるものは、保存状態の良否

嘉永四・一、七四丁 大 通釈は割

にかかわらずとりあげた。

注、語釈解説は頭書 内田正九〇四

〔二筆申入まいらせ候折柄よほと暖かに〕

庭訓往来絵抄 東都 金幸堂菊屋幸三郎 安政二、

百〔百瀬〕耕元書 東都 前川六左衛門

五八丁 大 虫汚

寛政九、書 二五丁 大(二六・七×六・

前付口絵で原著者を解説、頭書すべて

○) 吉田愛 三四一

そのページの絵入解説。 鬼久保二四六二

都名所古迹文章 (外題：都名所旧迹文章)

〔庭訓往来〕 下(七月状以下) 猿山周曉書 東都

大嶋氏享保八・作 大塚村福島氏明和

九・写 一二丁 半 虫 松岡四七六一

近郷村名集 鳳山明治三・写 一冊 半

大嶋藤城佐右衛門持 藤城一一七六

明治期の教科書で、教科書にするか一般啓蒙書にするかの判定は「埼玉県教育史」第三卷六三六―四四四ページ所載の表による。

思わぬところに資料的価値のあるもの

袋綴一丁に六枚ずつの入紙があり、一丁ごとに厚くして必要な箇所を検索しやすいように自家製本しなおした本であるが、小口が破れて中の入紙が閲覧できる。この入紙が資料として価値があるろうと思われる。

三世相大雑書 桜井良著 東京 瀬山佐吉 明治

三五・九〇、三四、一五―二〇ページ

中

合綴：(増補三元)九星方位独稽古 一

六丁(後欠)

本書は袋綴一葉毎に六枚ずつ入紙あり。

現在は元小口が破損して下記書名が見られる。ただしほとんど断簡のようである。

ある。

東京産婆会会員名簿(明治二二・二

月)、和漢洋薬品異名全集下巻(見

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

本)。東京府告示等(明治二三)、東京毛

糸紡織会社実際報告(明治二二)、滅藩

公債御処分歎願書宮城県関係、山口惣

兵衛(明治七一五)、新約聖書約翰伝

(明治二四)路加伝、馬太伝 川鍋二三二

目録記入の諸問題

目録規則は、長沢規矩也著：「増訂和漢古書目録法」昭和四十七年刊によっているが、細部についてはやや変更したく思っている。それは規則であるから記述はエッセンスになるが、大学教授にはそれでよいけれども、我々の実務上の便を考えたり若い研究者諸君の利用を予測すると、もう少し複雑な記述を入れる必要があるろうと思われるからである。

○書名未詳のもの

書籍形態の上で書名所在の場所を、採択する順位であげてゆくと、巻頭・目次首・巻末・序文首・題簽(書外題も)・見返・書扉・跋首・奥付・版心・序文中・小口書・帙外題・書背となり、巻頭・目次首・題簽が異なった場合は注記する(前掲目録法一九ページ)が、表紙はもちろん前付・後付の数丁が散失してしまったものは、さらに下記の程度の注記をしておく必要がある。写本には最初から書名を写さなかったと思われるものもあること、上記の通りである。

〔 〕 写 四九丁 大 朱筆入 虫

抑日本二古今父祖ノ仇ヲ報スル者多シ

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

八〇

ト曾我兄弟ノ者□切ノ名□志ノ節ナル
ナシ、工藤左衛門祐経ハ宇佐見久須見
蛙津其外船木ノ庄勢州長野ノ郡……

町田 八

〔 写 一六丁(前後欠) 半 虫

天保七年丙申四月 馬場小太郎正統

(花押) 高橋儀八殿

内容：河図洛書、九因法、九婦除歌決、
加減、撞除法、基数、大数、小数、量、
衡、里歩、田畝、諸軽重、奇麗強弱

鬼久保三三九六

〔 江戸 鶴屋金助 一枚 三八×五

○センチ 折疊

内容：源家將軍相続、曆中段善悪、
下段之和歌、有卦無卦年月日時、間尺
善悪之伝、親姓九族図、大日本省図、
破軍星之操法、六曜当日操様伝等

西角井一一〇七五

仮に巻頭の語句をひとくだけり取っておく。

〔安羅た万濃としのをた巻繰かへし……〕

刊 二二丁 大(二七、二×一八、二セ

ンチ) 陰刻 習字手本 遠藤三四八

調査して書名が判明したときは、その典拠資料を注記しておく。

〔悦目抄 藤原基俊撰〕 刊 前後欠丁 一冊 中

(書名典拠)群書卷二九一、歌学大系四

西角井九七七五

〔料理早指南 第四編〕 写 一冊 半

巻頭：早指南四編 料理談合集

書外題：料理指南書

文化元、かみなづき稿 醍醐陳人書記

(書名典拠) 翻刻江戸時代料理本集成

第六卷 西角井八九一一

書名の注記。古来有名な著書であっても書名が十分に内容をあらわしていないものについて「国書解題」初版(明治三〇、刊)第一冊に、附録として和田万吉が十数ページにわたって解説しているが、利用者は必ずしも専門の学者ではないから、こうした書名への注記が必要になってくるのではなからうか。(有名でないものにはなお注記を必要とするものが多い。)

大河内英雄全書 写 三〇巻六冊、存五冊 半 虫甚

美濃部弾正の物語

序、巻一―六 鬼久保二四七六

巻七―一二 〃 二四七〇

巻一三―一八 〃 二四六九

巻一九―二一 〃 二四七五

「婦女水滸伝」とだけでは、注になるか、ならないか。

名勇発功談 十一回五巻 十返舎一九著編 春齋英

笑画 江戸 大嶋屋伝右衛門 文政一

一・五冊 半

序：婦女水滸伝とも号べかりしを発功談

と称し(ママ)ハ…… 吉田愛三四七

判者に清水浜臣が招かれているのがわかればよい。

十五番歌合 氷川社十五番当座 文化十五、四、一六

於専池館興行 写 一冊 半

題：余花、聞恋、神祇

作者左 繁子 信嘉 直綽 茂信 茂雄

右 元竜 周之 安信 茂五 治臣

判者：浜臣 西角井一四六二

長州征伐に取材した諷刺文学であることをわからせる。

(梅鉢屋内金沢・雀屋内奥州)言葉の花 (絵入)

写 三丁 大

奥「チョイト金沢さん御聞なんし、徳さん

と長さんともめが出来たぎます、どうな

りんしたカ御聞なんしたカ、大正八も三

七十分に事済て霜々にても極のよるこび、

小二四へ六九事五さたやみ、春雨のかへ

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

代官所の報告写

甲斐国騒動一件 写 一冊 大 虫損

西村貞次郎支配所甲州津留郡内領出張陣

屋谷村附村々騒立 申八月 相沢五二九

うた常盤津老松 西角井八一四

「国書総目録」の記述だけでは十分に比較検討できないものは、

注記をくわしくする。

全圖選算題集 卷之一 写 二四丁 半

(巻頭)

外積二百一十二分 從周方者

短一八寸 問円径 答八寸

古今地方實録 卷之上・下 写 一冊 半 虫

上、王代地方方式、井田法式石盛之法式

次第、後堀川院御宇石盛等之次第、古屋

敷新屋敷等之次第、関東御用等之古例

下、往古井中興地方御竿等之次第、畑成田

之法式、一知行請取法式、田畑石盛并田

方式…… 内田正九二九

読みくせのある書名、読みにくい書名にはヨミカナをつける。

斐ひだのたくみ隠匠物語 題簽：新板飛弾匠物語 六卷六冊

(六樹園飯盛撰) 東都 丁子屋平兵衛

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

存五冊 卷之三欠 半

卷之一 三二丁、卷之二 二二丁、卷之四

二四丁、卷之五 二四丁、卷之六 二二丁

吉田愛三三〇三三五六

日本書紀 卷第一・二 神代

京都 出雲寺和泉掾 元禄八、跋(後刷)

二冊 大

上 四二丁、下 四二丁

吉田愛三三〇三三三一

地域買得埋の破留 身本遠寺大夫・身本冷大夫

三味線往太郎 さいの河原座 表紙とも

六丁 半 西角井五二四八

書外題には誤脱・省略・思いちがい等がよくある。

四季乱共外(書外題) 併書合綴 錯丁多シ 一冊

半 書名は四季乱題共外カ 川鍋二九四

鬼退治存意書各懐中之写 書外題・素懐書之写

一〇丁 半 右者静長官職斎藤監物脇坂

侯江差出候書附之由写 西角井一五〇一

表紙の破損

〔入〕 蒼虬十三回忌追善

嘉永七、 三、二四丁 半 川鍋一八五

〔子初秋月並冊子〕 (前半欠) (軸:菊廻屋主、立喜)

合綴:しきのとも 雪中庵、太白堂、閑月

庵、檀之本、暉雪庵、惟艸庵、子日庵、星

喜庵等撰 九丁 半 川鍋二五〇

武鑑の書名の採録は題簽がないと個別化できないのではないか。

事実は殆ど題簽の残っているものがない。

○著編者

有名な著編者は一般目録と同様の表記型式をとる。著編者名の下に記入する著作の種類は原著の表示のままにするのを原則とする。

刀弥上流以南修治告成碑 服元喬(服部南郭)記

寛保三、写 七丁 大

奉寄進石灯台一基 毛利筑後藤原広定外

西角井五二八七

百人一首 二卷二冊 小畑行簡(詩山)著 江戸 須原

屋新兵衛 弘化三・

百人一首の和歌と漢詩の七言絶句を並載

したもの 上・下二冊 半

土屋五五〇、五五一

四書纂要 見返・四書纂要 大学

金(金子) 済民(霜山) (一) 芳洲軒蔵

安政五・ 存二冊 大

大学上 六、一六、六、八丁

大学下 三二丁 吉田愛三九七一二九八

文選正文 一二卷一二冊 梁肅統編

服部南郭句読 片山兼山国読 葛山寿校

久保謙重訂

京師 風月荘左衛門 天明四・存一一

冊(巻二欠) 大 以下略

無名の著編者は原著の表記のまま。

〔小金原狩場略絵図〕 壮五郎かんがい書 嘉永二・

三・一八 一枚 二五×三四

大て口、御成道、をたつば御殿、田安一

ツ橋御てん、楊のかわむかずのやらい、

ばんぎ、はた本方此通りやらいとあみ

の中多八万人つめ、はた本ばかり、高サ

廿一丈ばかりのしゝあみ三丁あみをは

り…… 西角井九九〇一一二

八算相場割帳 横根村吉田氏金蔵(写) 天明六・

一冊 大 虫甚

九九ノ覚、八算割詞覚、問題

吉田佐二六六

著編者が郷土関係者である場合は注記する。

風車塵の言の葉 大福窓笑寿(著) 二七丁 半

文化一一、鈍々亭和樽序 文政三以後刊

内容：序(和樽、捨魚)、回文歌百首(文

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

政三、弥生)、追加二首、下よりかへし

御覽あれ一首を式首によめるさうた、

発句、総計回文一三六種、跋(笑寿)

著者は熊谷宿住 町田二九

(官民懐中)万用便 青木輔清編 東京 内田芳兵衛

明治一三・口絵六、目錄五、本文一一九

丁 小横(五、八×一二、七センチ)定価

三〇銭 編者は旧忍藩士

西角井九九一

○出版事項

出版地は原著表記のまま。町村の場合は国(あるいは県)郡名も

入れる。

出版者。奥付・見返・扉に連記された書店名はどれを代表に選ぶ

か、前掲目錄法七八ページおよび長谷川強「刊記書肆連名考」(「長

沢先生古稀記念図書論集」)参照。明確でないときはすべてを注記

にとどめる、としている。

高王白衣観音経 羽州由利郡本庄池田文孝施主

文化一一・二八折 折疊一六、七×

七、〇 藤城九四二

傷寒辨術 浅田惟常(宗伯)著

信陽松本 高美屋甚右衛門外

弘化二、跋 三、二七、四丁 大

八三

版心：勿誤薬室蔵 矢部二三一

なお明治初期刊行書で印刷・発売などで埼玉県域に関係あるものは、その事項を記入する。

小学化学書 ロスコウ氏撰 市川盛三郎訳

東京 榊原友吉出版、鴻ノ巢 長島為

一郎発売 明治一七・三冊 半

卷一 一、八、二九丁 吉田愛三五七

卷二 三九丁 〃 三五八

卷三 三八丁 〃 三五九

刊行年および写本書写に関する事項は上掲目録法のとおり。

印刷方法（刊本の種類）

木版の整版は一般ふつうのものとして記入しないが、木活は

記入する。

活版 明治初期教科書には書体（明朝体・楷書体など）も。

平版 楷行草三種の書体を混ぜたものもある。

銅版 辞書などに多い。

石印 上海版

謄写版、オフセット、コロタイプ、写真影印など。

○対照事項

丁数・ページ数は原著のとおり記入する。NCRでは後付を正確にとつて前付を省略するが、近代の図書にはそれでよいだろうが、

近世の場合はそういう切れないようである。印刷目録に表記するか

否か未定であるけれども、カードには繁雑で見にくいのが正確に記録しておいた方がよさそうである。

職原鈔 五巻五冊 北島親房述 刊 寛文二・大

慶長一三、吏部少卿清原秀賢後誌

仁 上 序一、二七丁（又二丁、計二

八丁）

義 二八―五五丁 若林 八九

礼 卷之二 二九丁（又二九丁、計三

〇丁）

智 三〇―五六丁（実は五八丁）若林 九二

信 補遺、後附三〇丁 若林 九三

錯丁か、あるいは製本の際に章の順序を変えたか。

職原抄支流大全（目頭書名） 三、六八丁 小

巻之四―五が先にあり、後に巻一―三を

綴。朱筆加点。 若林 九五

職原抄支流 刊 三七丁 小

正徳三癸巳年十二月吉日求之 若林 九四

紙の大きさは同じだが、異版の紙葉を集めて、新本を作ったか。

塵功記 東都 須原屋茂兵衛 文化一二・

二―三〇、三一の五〇、五一―七六丁 半

版心：目録「増補塵功記」

二―三〇丁「近道塵功記」

三一の五〇、五一―七六丁]増補塵

功記 町田 八一

「又〇丁」として増丁を入れている。

(拾遺) 四季部類大全 一名新季寄 (見返)

(絵入) 花屋庵著 浪速 塩屋忠兵衛 安政

六・四〇丁 小

丁数表記は四〇丁だが増紙数一八丁あり、実際は五八丁

町田一七五

版の異同を区別するためには何をどう記載しておいたらよいか。

孟子 朱熹集註 (後藤点)

版心：北村蔵 一行一五字×九行 野線

あり 存三冊 大 褐色表紙

卷一(内容巻末に卷之二とあり) 五、三

六丁 藤城一〇五四

卷二(卷之三、六) 六八丁

〃 一四五七

卷三(卷之七、一〇) 六七丁

〃 一〇五五

孟子 朱熹集註

大阪 河内屋喜兵衛外 天保三・(三刻)

一六字×一〇行 野線ナシ 存三冊 大

黒表紙

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

卷一 五、二九丁 藤城一〇五三

卷之二・三 二七、二七丁 〃 一四五九

卷之六・七 二七、三〇丁 〃 一四六〇

小学 (山崎闇斎点) 版心：倭板小学 山崎嘉点

(京都) 寿文堂(武田市兵衛) 延宝

四・二冊 大

一六字×八行 野線ナシ

内篇(立教、明倫、敬身、稽古)

七〇丁 藤城一〇四九

外篇(嘉言、善行) 七二丁 〃 一四五四

複本(同板後印)

内篇 表紙、序文、本文第一丁欠 七

〇丁 文化一三、藤城庄蔵求之

藤城一〇五〇

外篇 京師 武村嘉兵衛外 天明

三・(延宝四、初板) 〃 一四五五

丁付のない写本は一冊と記入するのが例であるが、わざわざ数えておかないと困る場合がありそうである。その場合は改めて数えることにしておけばよいであろう。

大きさ 大(美濃二ツ折) 半(半紙二ツ折)

中(美濃二ツ切の二ツ折) 小(半紙二ツ切の二ツ折)

特大 特小

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

縦長、横長、楕形の特長型はタテ・ヨコの寸法(センチ)を入れる。

唐本・韓本は特記したほうがよからう。

洋装本はNCRに準ずればよい。

装訂は和紙片面印刷の紙葉を二ツ折袋仕立にしたいわゆる線装本をふつう一般のものとして、折本・旋風葉・胡蝶装・粘葉装・大和綴など、また近代的針金綴でブッカー様の布を用いて背をくるんだ洋式製本等の特記する。

五名著漢文鈔 佐藤正範編 東京 山海堂出版部

大正八・(訂正) 明朝鉛活 二、四、

八、一六二ページ 半 四ツ目綴

文部省検定済中学校漢文科教科書 書

込アリ

五名著とは言志四録、十八史略、小学、

文章軌範、孟子

高等小学校読本 文部省総務局図書課蔵版 東京

大日本図書 明治二二、明朝鉛活 存

一冊 半 袋針金綴

卷之六 三、一四五ページ 遠藤四四〇

小学理科教科書 児童用 棚沢源太郎・樋口勘次郎

著 東京 金港堂書籍 明治三三、訂

正再版 存一冊 半 洋

卷四 四、八四ページ 遠藤四三五

利用上の便宜をはかるための改装本(自家製本)は記入しておいたほうがよい。

たほうがよい。

日用食性(目首) 三巻合綴自家製本 上巻巻尾書名

：食性能毒 (曲直瀬玄朔)

四八(一三欠)、一四、一九(下欠)丁

中横 汚

内容：日用食性能毒、日用諸疾宜禁集、

日用灸法、禁灸穴図 遠藤四三二

〔俳諧月次句合冊子一枚刷合綴〕 仮綴 天保一三・

— 弘化三・

一冊 半

(内容)

月次句集 壬寅七月分 幻遊庵魚仏坊

評 東都本所 巴連 五丁 半 表紙

青刷

月次句集 壬寅八月分 幻遊庵魚仏評

巴連 六丁 半 表紙青刷

歡喜以那理奉額句合 宝雪庵評 羽団

扇連 二丁 中 表紙色刷

月並角力句合 東太白堂・西素雲堂評

天保一三・ 三丁 半

一枚刷

つき並白遊庵選 寅八月 三丁 半
宇女廻満喜 六舛庵・匏庵評 天保一
三・五丁 半 以下略
田口栄一九四八

富士見十三州輿地全図 秋山永年(墨仙)画 天保

一四・序 五色刷 一舗 一五三×一

七八 折畳 二七×一八 序：船越守

愚、船橋晴潭 町田四七

鴻巣宿組合足立郡箕田村〔麁絵図〕

名主儀助外写 明治三・一枚 二

七×四〇 西角井四八四八

小金ヶ原御用掛御役人附 蔵板 嘉永二、

一枚 四八×七一センチ 折畳 虫

小金原狩場略絵図付 西角井九九〇〇

○注意事項

識語の大意、所蔵者、所蔵印、朱点朱筆書入れ。書込み。

虫鼠害、ムレ、フケ、破汚損の程度。

内容細目、附録

合綴

○注記するだけでなく、各事項の記入の位置を再検討する要はないか。

○請求記号記入の形式

当館の場合は非常に繁雑の感を与えるが、時間をかけてこの記入の形式を考えてみる必要がある。

十三経注疏 汲古閣本

周易兼義 九卷六冊 存五冊(巻第二欠)

魏王弼註 唐孔穎達正義 汲古閣

崇禎六・

唐本(二四×一五) 朱筆書入

巻第一書扉：十三経版刊於七星橋毛

氏世伝 常熟汲古閣版

也 巻第六カバ裏所

有者名：所久喜邨 醉

古堂

上経乾伝導第一 内田正六二九

巻第三第八・九 内田正六三〇・六三三

以下略

通俗列国呉越軍談

〔清地以立〕 (元禄一六・序)

刊 存七冊 大 周敬王に始まり呉王

夫差とその臣下の事跡を述べ秦の天下

統一を語る。

巻之一 一、八、一、二六丁 遠藤 四二七

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進行状況と課題

表4：10～12月の作業状況

分類	部数(冊数)	刊写時代区分	
		近世	近現代
国書			
総記	9 (37)	9 (37)	
神祇	12 (12)	12 (12)	
仏教	40 (53)	37 (50)	3 (3)
言語	9 (23)	8 (22)	1 (1)
文学	109 (198)	93 (177)	16 (21)
音楽演劇	3 (3)	3 (3)	
歴史	59 (218)	54 (201)	5 (17)
地理	16 (20)	10 (14)	6 (6)
政治法制	21 (22)	13 (13)	8 (9)
経済	12 (25)	8 (15)	4 (10)
教育	244 (365)	85 (114)	159 (251)
(教科書)	205 (297)	49 (55)	156 (242)
理学	17 (25)	14 (22)	3 (3)
医学	58 (142)	51 (116)	7 (26)
産業	5 (5)	4 (4)	1 (1)
芸術	9 (11)	7 (9)	2 (2)
諸芸	28 (34)	26 (32)	2 (2)
武学武術	8 (12)	6 (10)	2 (2)
小計	659 (1205)	440 (851)	219 (354)
漢籍			
経	62 (152)	62 (152)	
史	3 (17)	2 (12)	1 (5)
子	2 (3)	2 (3)	
集	16 (63)	13 (52)	3 (11)
小計	83 (235)	79 (219)	4 (16)
総計	742 (1440)	519 (1070)	223 (370)

表5：前半期と第3四半期との作業状況の比較

	4～10月	10～12月
国書	1291 (2203)	659 (1205)
近世	856 (1321)	440 (851)
近現代	435 (882)	219 (354)
漢籍	106 (559)	83 (235)
近世	101 (540)	79 (219)
近現代	5 (19)	4 (16)
総計	1397 (2762)	742 (1440)
近世	957 (1861)	519 (1070)
近現代	440 (901)	223 (370)

卷之三	一、二六丁	〃	七二八
卷之四	一、二六丁	〃	三六六
卷之五	二九丁	〃	四〇六
卷之六	一、二九丁	〃	四〇〇
卷之八	一、二三丁	〃	四二二
卷之九	一、二八丁(錯丁甚)	〃	三四九

古今武家盛衰記 写 二四冊 半

卷第一	石田三成	田口栄	一九七二
卷第二	大谷吉隆	〃	一九二一
卷第三	関ヶ原	〃	一八九一
卷第四	大友・島津九州大名	〃	一八九二
卷第五	平塚為広	〃	一八九三
卷第六	生駒高俊	〃	一八九四
卷第七	上杉景勝 虫	〃	一八九五
卷第八	直江兼統	〃	一八九六
卷第九	甘糟虎氏	〃	一八九七
卷第一〇	富田藏人	〃	一九一三

以下略

分類表の諸問題

近世の書籍と近現代の著述とを混配するとなると、どうしても馴染まない箇所が出てくると思うが、それをどうするか、これから考

当館収蔵文書に含まれる書籍の目録作業進捗状況と課題

えてゆきたい。家によつては民族字の分野における特殊な主題の紀要論文の抜刷などが相当あるが、これを古書分類表の「故実」や「風習」をふくらますことで解決できるか否かは問題であろう。

索引

索引は書名索引のみ。合綴・付録の書名、冠称付と冠称を取ったもの、別名・通称すべて共に引けるものにした。巻末に横組で付す。

追記

作業進行のペースについて上掲表1・2のような報告をしたが、秋の曝書後の三〇日間の状況は表4のごときものであり、前半期と第3四半期の進行状況を比較したのが表5である。だいたいこんな調子で仕事が進むものとみてよいだろう。ただ文書の目録作業でも訴状願書のややこしいものが多いと補題をつけるのに時間がとられ、予期せぬ停滞があるものだが、いまのところしばらくはこんな調子で進むと見てよいと思われる。たいへん粗雑な報告と問題提起で恐縮だが、館員諸賢の今後いつそうの御理解・御鞭撻をお願いして擧筆したい。

(一九九一・一二・三一)